

ICASSI 2013 全体講義：アドラーの理論は今でも確かに通用する

ICASSI Plenary Lecture 2013:
Adlerian Theory is Valid in Contemporary Times
c Eva Dreikurs Ferguson, 2013

エヴァ・ドライカース・ファーガソン(アメリカ)
水野美津子(東京) 訳

今日、私達はアドラー心理学についてお話をしていますが、これは大変大きなテーマです。私が今日月曜日の朝に皆さんにお話しするのを楽しんでいる理由のひとつは、この部屋にいらっしゃる専門家と(皆さんの中には、専門家も間違いなくいらっしゃいますね)、アドラー心理学を学び始めたばかりの大勢の新しい方々とをまとめる機会となるからです。誰もがアドラー心理学について何か新しいことを学べるようにお手伝いすることは、素晴らしいチャレンジといえます。私達が今朝ここに集ってそれを試みることを、私はたいへん幸せに感じています。

それでは、いくつかの基本的な概念から始めましょう。まず、第一に、アドラー心理学を学び始めたばかりの皆さんは、アドラーがヨーロッパそれも特にウィーンにおける社会的な変革の時代に生きていたことを思い出す必要があります。多くのことが変化していました。覚えていらっしゃる方もあるかと思いますが、第一次世界大戦以前には複数の帝国が存在し、独裁的なルールが社会における規範となっていたと考えられています。そして第一次世界大戦が起きた時、大規模な社会的な変革がヨーロッパを席卷しました。

フロイトは、アドラーより20年以上も前に生まれており、彼はまさしく旧世代を代表していました。これは、フロイトに影響を与えたものごとと、アドラーに影響を与えたものごととは異なっていたということを意味します。精神医学というものが当時存在していなかったため、アドラーはフロイトの若い同僚として働きました。当時医学の中に精神医学という分野はありませんでした。つまり、フロイト、アドラー、そして何名かの同僚たちが開発・発展させたものが、今日私達が精神医学と呼んでいる専門分野の先駆けとなったのです。感情や動機づけを含む、心と心に関するその他すべてのことを理解するという点で、彼らはほぼゼロに等しいところから始めたのでした。

アドラーは社会民主主義を象徴していました。彼は軍医として第一次世界大戦に参戦し、戦争のひどい状況を目の当たりにしました。そして、人間が形作られる際の社会の役割というものを理解しました。彼は第一次大戦後のウィーンの復興を援助しました。第一次大戦後のウィーンとドイツはひどい貧困の中にあり、例えば米国と比べ非常に悪い経済状況でした。新しいアイデアが創造され、ウィーンが本質的に社会主義者の街になった、そんな時代でもありました。アドラーは、飢えた労働者の健康状態を改善し生活の向上を図るための支援の前線にいました。市民の健康改善を援助する中で、彼は精神面での健康の強化に対しても援助の手を差し伸べました。

アドラーは、チャイルド・ガイダンス・センターを開設しました。子どもたちが学校においてより建設的な市民となれるよう、教師と親は一緒になって助言を求めました。

皆さんが ICASSI で学んでおられるのは、アドラーが1920-30年代に発展させたこれらの素晴らしいアイデアなのです。皆さんは、子どもたちは共同体からの援助が必要であるということを知っています。教師が治療的援助ができるという考え方は、1920-30年代の思潮の中で、本当に画期的であり、革新であり、革命でした。治療的介入とは実は関わりの度合いと機会の問題だということ、そしてカウンセリングや治療的な場面においてだけでなく、私達が子どもと関わりあう中でも治療的な影響をもたらすことができるのだ、ということアドラーは示しました。治療は、毎日の生活から切り離すことはできません。子どもと関わるその度ごとに、私達は治療的で建設的な効果をもたらすこともできますし、否定的で勇気をくじくような効果をもたらすこともできます。ですから、クライアントが5年間毎日セラピストのもとに通うプロセスとして治療をとらえるフロイトとは、アドラーは一線を画していました。フロイトのモデルはアドラーにとっては存在しませんでした。

アドラーの考えでは、子どもが自分の行為の目的を理解できるように手助けすることによって、私達はごく短期間のうちにその子どもを援助することができるのです。そして大人も、問題へと私達を導くものがあったい何であるのかを認識しさえできれば、短期間での変容は可能なのです。このようにしてアドラーは、教育・カウンセリング・心理療法の三つを、精神の健康を築くのに役立つ、広範囲にわたるアプローチへと統合しました。まさにこの点は、他のどんな精神医学や教育学とも違う概念です。

アドラーは学校に関するモンテッソーリの考えに賛同しており、ドライカースもモンテッソーリの学校と深く交流していました。ただ、力点を置く場所が異なっていました。人を成長へと導くものはいったい何なのか、当時精神疾患と呼ばれていたものへと導くものは何なのか、精神の健康へと導くのは何なのか、これらを考えていたという点でアドラーは思考の大きな変化・大きなシフトを象徴していたと、見てとることができます。アドラーが彼の理論を完成させるにはまだしばらくの時間が必要でした。とは言え、1937年に彼がこの世を去るまでには、完全に統合された体系を構築したのでした。そして私は、皆さんにそれをこの ICASSI で学んで欲しいと願っています。

皆さんがアドラーのアイデアを完全に理解しそれが腑に落ちるまでには、何年かかかることでしょう。ジヴィット [Zivit: ICASSI の教授陣のひとり] が話してくれた興味深い例は、私の生徒にも当てはまります。初めてアドラー心理学を学んだ時、皆さんは「全くもってこれは道理にかなっているし、簡単だわ。」と思うでしょう。大学での私の生徒達も「アドラーに反対する人なんていないわけない。あまりにも明白だ。」といます。そして実際に皆さんが日常生活や治療や職場に応用し、学び、実践する段になると、その微妙な違いを理解することになります。人は、学び続けます。ICASSI で教えている私達も皆学び続けます。なぜならこれらの洞察がもたらす結末は、ただただ素晴らしく深淵なものだからです。

それでは簡単な原理から始めましょう。

フロイトは、分割された自己というものを信じており、分割された自己の中で、自己の部分同士が互いに対立していると考えました。皆さんの中のお二人ほどと話をしてみても分かったのです

が、今日のヨーロッパでは、力動精神医学と呼ばれるものがそのような基礎前提をもつ傾向にあるようです。それはアドラーが否定した前提です。彼が唱えたのは、「私達は、全体として、統合された人間として機能する」という前提です。たとえ私達が内的葛藤を経験しているように見えたとしても、全体としての人間の一部分が人生の中で行動しているだけなのです。例えば私達が大学生だとして——よくそういう例をいつでもまのあたりにするのですが——宿題を避けたいと強く望んでいたとしたら、私達は内的葛藤という素晴らしい言い訳を思いつくことができるでしょう。つまり、「いい成績はとりたいんだけど、ガリガリ勉強するのは大嫌いなんだよね」と。そして、建設的に課題に対処することを避けるための素晴らしい方法として、友達と映画に行く代わりに内的葛藤が使えるわけです。もし私が本当に利口だったら、一生の間、強迫的や神経症的になっていることができるでしょう。そうすればどんな責任だって避けて通ることができます。私がやるべき大変な課題を、私のまわりにいる誰にだって代わりにやってもらうことができます。私は、全くもって美しく苦しむことができます。それによって逃げることもできます。

人々は私をかわいそうと思ってくれ、私の世話をやいてやりたいと思ってくれるのに、なぜ私はこの神経症を手放す必要があるのでしょうか？ 持っていたら便利なのに。ですから、アドラー心理学の観点から考えると、私達に内的葛藤がある時、そのために人生の課題に取り組むことができない時、内的葛藤は、世界に向かう動きの中で私達が何をしようとしているのかを示す症状となっています。そして、そういう観点から見ると、私達誰もがそれはたくさんの葛藤をかかえることができるのです。

私がここでお話ししていることは、個人が世界の中でどのように動いているのかを全く認識せずに内的葛藤について述べるフロイトや、現代社会におけるほかの多くの流派のアプローチとは病理学に対する重点の置き方が全く異なっています。つまり、対処しなくてはならない課題と照らし合わせて個人はどのように動くのか、という問いにアドレリアンは注目するのです。このように、目標という概念はアドラー心理学にとって非常に重要な概念です。個人はどのような目標に向かって動いているのでしょうか？ 個人は統合された全体であることを思い出してください。個人は、その人自身が設定した目標と照らし合わせながら動きます。これは自分が作った目標です。例えば、「私はリーダーシップを発揮するところを人から決して見られてはいけない、なぜなら私は信用できない人間だから。私はすべての大きな責任を避けるようにしよう、なぜなら私は不十分な存在だから」という目標を持つ人もいます。また、「私は物ごとの責任を引き受けトップに立つ人間でなくてはならない、安全であるにはそれ以外の方法はない」とか、「私は一番かわいらしくて感じのよい人でなくてはならない、人々に私のお世話をしてもらわなくちゃならないから。私は人々に注目してもらわなくちゃいけない、もしそうできないならわたしは無価値な人間になってしまう」という目標を持つ人もいます。こんな風に私達には人生の目標があり、それに向かって動いています。そしてこれらの目標は意識されていません。「意識していない」とアドラーが表現しているのは、何であれ私達が意識的には全く気づいていないものを意味しています。フロイトにとっては深い無意識が存在しましたが、アドラーにとってはそのようなものは存在しませんでした。アドラーにとっては、意識されているかそうでないかの問題であり、理解している人の助けがあれば私達は自分の目標に気づくことができます。

いいでしょう。このように私達には全体論があり、目標または目的性がありますが、これだけではまだアドラーの理論とはいえません。アドラーは、人が成長する唯一の方法は社会的な世界・社会の中にしか存在しない、ということに気づきました。これは非常に重要です。なぜならフロイトの概念は本質的には生物学的決定論に基づいていますが、一方アドラーは、第一次世界大

戦後という文化的時代の落とし子として、その文化に影響を受けました。ある人が生き・育ったその社会的生活を理解することなくしてその人を理解することはできないということに、彼は気がつきました。ですから、人生の最初の数年に小さな子どもとして育ったその社会的な世界が、そしてまた今あなたが生きているその社会的な世界が、現在のあなたの人となりを作ったのです。私達がどんな人間であるかにとって、これは極めて重要なことです。ある人が生きているその社会的な世界を理解せずにその人を理解することは、たとえ試みたとしてもできません。全く無意味です。私達がその中で育ったその社会的な世界は極めて重要なのです。

私達が小さい頃に、自分はどんな人間なのか・世界とはどんなところなのかという概念を発達させたということが、なぜ重要なのでしょうか。これらの概念は、私達の全人生にわたって私達の中に存在し続けるからだ、とアドラーは言いました。この世界とはどんな所なのか、その世界の中で暮らす自分はどんな人間なのかについて、私達は小さい頃になんとか見つけ出そうとしました。4歳、5歳、6歳になるまでになかなかいい結論に達すると、それ以上は問わなくなります。私達に関する限り、それが現実となります。世界と自分についての真実となるのです。私達は、それについて考えることさえしません。それが客観的現実だと思い込んで、その概念を持ったままずっと生きて行くのです。

人々が持つこれらの概念について、皆さんはクラスの中やブロックワンの講義の中でもっと多くのことを聞くことになるでしょう。そんなことは大人になった自分がどう行動するかには関わらない、ともし皆さんが考えているとしたら、きっとびっくりされることでしょう。私は職場に関するクラスを教えています。そこでは私達が作り出している根本的な思い込みが仕事での行動の仕方にどのような影響を及ぼすかについて学びます。結婚と家族に関するクラスに参加される皆さんは、その思い込みが、皆さんとパートナーとのかかわり方や皆さんがどんな親であるかということに影響を与えていることを理解されることでしょう。

私達の基本的な思い込みは私達の交友関係に影響を及ぼします。どんな人を友達として選ぶかを左右します。十代の人生においては、友人がやっているドラッグを自分もやるのか、それともドラッグはやらないで、なおかつ友達でいる方法を学ぶのか、こういったことにも影響を及ぼします。私達の思い込みはどうやって特に失敗に向き合うかということにも影響します。

アドラー心理学には関連していない心理学において、人々がどう成功や失敗に反応するのかについて多くの研究がされてきました。そして非常に多くの文献が示しているのは、どう人生を生きていくかという点で非常に重要なのは、失敗体験に対してどう反応するかである、ということでした。この分野で役立つリサーチを行ったのがマーティン・セリグマン (Martin Seligman) です。もし、アドレリアンでない人々の文献に興味があって、アドラー心理学に関連するリサーチについて学びたい方が皆さんの中にいらっしゃったら、セリグマンのこのリサーチについて述べているいくつかの記事を読まれるべきだと思います。成功に対してどう反応するかはそれほど大きなインパクトはなく、失敗に対してどう反応するかが非常に重要であるということが明確に示されています。もし失敗に対して諦めるという反応をした場合には、影響は長期にわたることでしょう。人によって反応はとても異なります。セリグマンは、強靱な特性を持っていて失敗に対して建設的に対処できる人たちと、失敗に対する対処法があまりうまくない人たちがいることを発見しました。

残念なことに、この文献はアドレリアンによるものでないため、研究者たちはこれらの人々がどのようにしてこんな風になったのかを理解することができません。彼らには、どのようにしてある人たちはこんな風になり、別の人たちは別のようになるのが理解できないのです。アドレリアンにはそれを説明することができ、それを言い表す単語があります——それは「勇気」と呼ばれています。皆さんの中には、「エンカレッジメント（勇気づけ）」に関するコースを受講される方もいるでしょう。素晴らしいコースです。アドラー心理学において「勇気」は、私達がどう失敗を克服するかそれともしないのかを左右する鍵なのです。それは、私達が母親や父親や兄弟姉妹と共に成長する際に、小さな子どもとして学ぶことの一部なのです。兄弟姉妹から「おやおや、お前はなんてバカなんだ」なんていつも言われずに済んだ幸運な人達もいれば、幸運でなかった人達もいます。この講義室の中にも幸運でなかった人達がおられることでしょう。そんな方々は、兄弟姉妹から「おやおや、お前はバカだなあ。何にも知らないんだからな。」と言われ続けて、それを信じるようになってしまいました。そんな皆さんも今ここにいらっしゃるからには、そんなことを信じることはお止めになることでしょう。重要なのは、私達は成功に対してどう対処するかを学び、そして失敗に対してどう対処するかを学んだ、ということです。これは、アドラーがライフスタイルについて語った時に話題にしたことの一部です。失敗にどう対処するかを学ぶことが私達には重要です。完璧主義的な私達の社会においては、失敗に向き合い対処する練習をする機会を私達はあまり与えられていません。

これから皆さんが勇気づけについて学ばれる内容の一部には、ドライカースが『行為（行動）と行為者の違い』と呼んだものが含まれます。これはとても大事なことだということがわかっています。私達の多くが「最近私は何を成し遂げたか？」と振り返ることによって、「私は大丈夫だろうか？」と判断します。これは、私達の社会生活の一部、つまり、社会が私達に信じ込ませたいことなのです。でもこれは私達の精神的な健康にとってはよいことではありません。これはドライカースが『社会的平等（Social Equality）』という本を著した理由となっています。この本は、ドライカースが生前一番誇りに思っていた著作でした。いかに私たちが自分自身に対して勇気くじきをしているか（自分で自分の勇気をくじく——これこそ実際に私達がしていることですね）、私達はどうやって自分に対する勇気くじきをやめ、本当は「私の行為は私自身ではない」ということを理解しなくてはならないのか、それに関して書かれた本です。私達の誰もが価値を持っている、これもアドラーが教えてくれたことです。

私達ひとりひとりがユニークな存在です。私達は誰とも異なっています。でも、私達が誰かに比べて優れているということではありません。また誰かに比べ劣っているということでもありません。それがドライカースがこの本を『社会的平等（Social Equality）』と呼んだゆえんです。社会的平等とは、私達誰にも価値があり、それも同等の価値があるということを意味しています。人間は誰もが同等の価値を有しているのです。これは私達の多くにとってなかなか信じることのできない概念です。社会的平等という暮らし方をどうしたら学べるのか、それをドライカースは重要視しており、それゆえ彼はこの本こそ一番重要な著作であると考えたのでした。

さて、アドラーが社会的現実（Social Reality）という観点から語った概念に戻しましょう。私達は社会的経験から生まれた存在だ、という考え方です。

私達の社会的経験が、私達の信念や私達自身を形作ります。私達が何を信じていようと、これ

らの信念が私達の行動全てを形作ります。人生の中で起きる出来事に対してどのように私達が反応するかを形作ります。その中心にあって基本的概念となるのが、私達の内なる自己、つまり社会的な自己なのです。まるまる一世紀100年にわたり、この概念は心理学上の革命的な概念でした。現代心理学に携わる多くの人にとっては、今でもあり得ない概念であり、彼らはそれを受け入れることができません。人間を生物学的な過程に貶めたいという願いはあまりに強く、どの世代においても心理学・精神分析学の主な力点は、私達の行動・信念・感情を生物学的決定論で捉えるところに置かれています。

つまり、脳が私達がどう生きるかということを決定するという信念です。皆さんが「脳」という時、脳の中に流れる化学物質を含めていることがあります。私にとってこれは今でも驚くべきことです。なぜなら、社会生活が脳を変えることを示す文献が既にこれまでに膨大に存在しているからです。（文献はあるのに、専門家はそれを無視しているのです。）皆さんの中にそういう文献を読みたいと思われる方がいらっしゃったら、私にメールをくだされば、何を参照したらよいかお知らせすることができます。個人が現在・過去・幼い頃に体験した社会的経験は脳の機能の仕方にとっても大きな影響を与えるという、アドラーの考えを支持するとても強力な証拠があるのです。にもかかわらず人々はそれを無視します。私が思うに——推測にすぎませんが——彼らが無視するのは、アドラーの考えがあまりにシンプルだからではないでしょうか。ドーパミンの経路とか、前頭葉、頭頂葉、脳のある部分、あるいは化学反応のある部分が正常に機能していないとか、薬の錠剤を与えられた人が異なる行動をとるとか、そういうことが特定できたら、それで皆さんは達成すべきことを達成したと感じるのでしょうか。アドレリアンの観点からは、そして長い目でみたら、本当はそれほど役にたったとは言えません。なぜならアドレリアンの観点からは、その人が持つ根本的な信念・概念・目標を変える必要があるからです。これらの概念や社会の中でどう生きるか・行動するかが、脳がどう働くかを方向づけます。

このように、アドラーは私達のために足場を築いてくれたことがわかります。私達は、社会的存在に他ならない、とアドラーは言いました。

この素晴らしいケーキの謂わばクリーム（真髓）は、私達誰にも所属の欲求があり、所属していると信じる時には、貢献したいという強い欲求が生じる、というところにあります。これを Social Interest（共同体感覚）、ドイツ語では Gemeinschaftsgefühl（ゲマインシャフトツゲフュール）と呼びます。この概念はあまりに力のある概念であるため、多くの人々が今でもなかなか理解できないでいます。アドラー心理学の私のクラスの学生たちは、こう言います。「あなたが私達に教えてください。みな理にかなっています。とても明白です。でも、誰もがみな生まれながらに親切であるとおっしゃらないでしょうか？ 彼ら人々は意地悪で、自分の欲しいものを手に入れようとやっきになるけれど、他の人に対してはこれっぽっちも与えようとは思っていないんですから」

それで私が、「それはそう学んだから。社会が私達に競争的であれと教えたから。社会が私達に勝者と敗者を信じるように教えているから。そして私達には、これらの信念を変えることができるのです」そう私が言うと、皆は「それが本当なら素敵ですね。でも私は信じないわ」と言います。そうやって、彼らは子どもに向かってどなり続けたり、弟や妹をけなし続けるのです。そしてある日クラスの中で、あの悪戯っ子を勇気づけることがあなたにもできるかもしれない、という検討がされます。

「もしやってみようと思われるのなら、試してみて報告をしてください」と提案したことがありました。そうしたら、ベビーシッター先の子どもたちと争ってきたという一人の女性が名乗りをあげました。その5歳の子どもは行儀が悪くて手に負えないと彼女は深く信じていて、「彼については何も言えることはないです。なのに、どうやったら彼のことを勇気づけられるのでしょうか?」と言います。そこで私は彼女に言いました。「そうね、もし彼がそんなに憎たらしく振る舞って癩癩を起こしているなら、彼には『なんて素敵な癩癩なのかしら!』って言うことができますね」と。

私はこれをドライカースのビデオのひとつからそのまま拝借しました。その中でドライカースは、他のことがみんな失敗したとしても、例えば、「あの子はなんて素晴らしい嘘つきなんだ」と言うことができると指摘しています。彼女は言いました。「いいでしょう。やってみます。」彼女が次のクラスにもどって来た時、その表情は「信じられない」と語っていました。その小さな子どもは、彼女が彼に対して何であれいいことをいったのがあまりにショックで、彼は癩癩を爆発させているその真最中に動きをとめたのでした。次の日は、裸で走り回って服を着なさいと10回もどられるかわりに、彼はすぐに服を着てしまいました。3日目には、学校から家に帰って来て彼女にハグをしました。自分の行動をほんの少し変えただけでこの小さな男の子にこれほど大きな影響を及ぼしたことに、彼女はとても驚きました。このできごとのあと、彼女は納得しました。もし私達が人々を勇気づけ、所属するグループの幸福と利益のために貢献するのなら、私達は人々の行動や感情に大きな変化をもたらすことができる、それを彼女は理解しました。ですからアドラーが語ったように、もし私達が所属感を感じ自分には価値があることを理解するのなら、私達が奮闘努力する方向は自然に貢献へと向かうのです。でも、もし「私は十分じゃない (I'm not good enough)、他の人の方が上だ」と、自分は不十分だとか劣等感だとかを感じているならば、私達は自分のエゴや地位を守ることに集中することでしょう。グループの幸福と利益のために貢献しようと奮闘努力することはないでしょう。これはすなわち、共同体感覚は生まれながらに持っている傾向ではありますが、それは幼少期にまたは人生のどのタイミングであっても、養い訓練する必要があるということの意味しています。もし私達が勇気がくじかれるような世界に住んで、そこで勇気をくじかれているのなら、貢献に向かって奮闘努力することはほとんどないでしょう。

私達がどのように子どもを育てるかがなぜそれほどにも重要なのか、これがその理由なのです。重要なのは、子どもに「自分は特別だ」と感じさせることではありません。そうではなくて、「私はチームの一員だ。私は対等な者同士からなるグループの一部だ。私は他の子を尊敬する必要があるし、自分のことも尊敬する必要がある」と子どもが信じられるように、私達には援助する必要があるのです。

ドライカースは、屈しもせず支配もせず、とよく言っていました。彼がそう言った理由は、対等な関係にある時、私達は他の人々を支配もせず、他の人々が私達を支配するがまにさせることもないからです。ですから、対等な関係と共同体感覚は両輪の輪と言えます。私達の多くが、小さな子どもの時にどうしたら良い子でいられるかを学びました。おそらくこの部屋にいらっしゃる皆さんのほとんどは、どうやったら「良い子」になれるのか学ばれたことでしょう。問題は、「良い子でいる」ということと「貢献する」ということは別物だということにあります。私達の多くは、特別であるために良い子になることを学びました。周りの人々が褒めてくれ、賞賛してくれる——そうすれば、私達は優越感を味わえます。そして「悪い子たち」を見下します。私

達の「良くあること」は、依然として縦関係の一部なのです。対照的に、対等であることは横の関係です。貢献したいと思う時、私達の関心は良いことが為されることに向いていますが、自分が良くあることには向いていません。他の誰かが何か良いことをしたら、私達は同じように幸せに感じるでしょう。特別であるために良くありたいと思っている時には、他の人には良いことをして欲しくないのです。ですから、次にあなたが何かの助けになりたいと思った時、相手があなたの協力を受け入れず、あなたがひどく怒ったとしたら。そうしたら考えてみてください。自問してください。私が手を貸そうとしているのは、本当に貢献したいからなのか、それとも優越であろうとしているからなのか？

私達の目標と行動の本当の意味を理解した時、多くはとても恥ずかしそうな顔をしたり、顔を赤らめたりします。このように、アドラーはものすごく素晴らしい、社会的な、先見の明のある思索者だったことが、皆さんにもお分かり頂けたと思います。心理学はまだ彼に追いつこうとしているところです。アドラーとドライカースが真に理解していたことを、人々はますます理解するようになっていきます。アドラー心理学の研鑽を積んだ私達は、家族について理解し、個人の私的論理（プライベートロジック）について理解し、個人が職場や家でどのように人々と関わるかを理解しています。私達が独裁的で勇気がくじかれるような社会の中で生きているのなら、個人と家族が民主的で対等な関係になることはよりずっと難しいでしょう。でも、家庭にいる子どもは、協力的であることと高い共同体感覚を学ぶことができます。学校では、教室が競争的で勇気をくじく場所にならないよう援助する必要があります。

アドレリアンは、社会を変える援助をするのは名案だと学んできました。より多くの共同体が民主主義に従うようになれば、個人と家族が民主的な方法で機能することがよりたやすくなります。ドライカースが彼の人生の最後の20年で書き表したのは、人が人と関わる際の独裁的・民主的・放任主義的な方法の違いを人々が理解できるようにするためでした。現代社会において、自分たちは民主主義だと考えていて実は放任主義になってしまっていることについて、私はこれまでも論文を発表してきましたし、これからも発表し続けるつもりです。何が独裁主義で何がそうでないかの違いを多くの人々が理解していることを示すデータはたくさんあります。独裁主義というのは、「私の言う通りにせよ」という服従モードであることを人々は知っています。そしてその反対も知っており、それを「民主主義」と彼らは呼びます。でも違うのです。それは放任主義なのです。ですから、私の生きる現代においては、何百万人もの甘やかされてわがままな子どもが存在しています。ルールもなく、両親は子どもの言いなりになっており、それが成人してから起きています。ルールは定められていても、民主的であるというよりは迎合的になっていることがしばしばです。

ですから、アドレリアンにとっての課題は、民主的な社会を築く手助けをどのようにしていくのか、ということになります。これについては多くの文献がありますし、皆さんはここ ICASSI で多くのことを学ばれることでしょう。放任主義的ではなく民主主義的になるためにはどう学んだらよいのかについて、私はもっと論文を発表できればと願っていますし、皆さんももっとお読みになれるようにと願っています。

* * *

記者あとがき：この講演録は、2013年7月22日に公式録音された ICASSI 全体講義を、翻訳者が英

文原稿に起こし、講演者であるエヴァ・ドライカース・ファーガソン先生の校閲を受けた上で日本語に翻訳したものです。さらにその翻訳文を中島弘徳指導者にレビューしていただきました。

記者が初めて参加した ICASSI で、最初の講義を聴いていた時、「失敗にどう対処するかを学ぶことがとても重要です」というファーガソン先生の言葉に衝撃を受けました。それこそ私が長年必要としてきたことだと確信したからです。そんな理由もあって、先生に翻訳のご許可をお願いにあがり、ようやく今日この記事となって発表することができました。

謝辞：まず、講義を翻訳することをご許可くださったことに対して、ファーガソン先生に心よりお礼を申し上げます。作業に大変な遅れが生じてしまったにもかかわらずお待ちくださり、ご多忙にもかかわらずご協力いただきましたことについても、ファーガソン先生には感謝の念が堪えません。また、快くレビューをお引き受け下さり、様々な面でご協力・ご援助下さった中島先生に心よりお礼申し上げます。また、ICASSI への参加を以前から勧めてくれ、この翻訳記事を皆さまのお手元にお届けするきっかけを与えてくれた友人に感謝いたします。

最後になりましたが、これまで、人生の課題に立ち向かえるように私を勇気づけ続けてくださった野田先生に、心より感謝申し上げます。

Translator's Note : This article is translated based on the official recording of preliminary lecture given in ICASSI in Wageningen, Netherlands, on 22nd July 2013. The English original article was transcribed by the translator, then proofread and edited by Dr. Eva Dreikurs Ferguson. The Japanese translation was reviewed and edited by Professor Hironori Nakajima.

When I was sitting and listening to the very first lecture in my very first ICASSI, I was hit by a stroke of lightning, by Dr Ferguson's words, "It is very important that we learn how to cope with failures." Immediately I was convinced that it was exactly what I have been needing to learn. It was the beginning of how this article came to life.

Acknowledgement : Firstly, I would like to express my sincere gratitude to Dr. Ferguson for allowing me to translate her lecture, her time, patience, and encouragement throughout ICASSI and this work. My sincere gratitude also to Professor Nakajima for kindly accepting reviewing work and encouraging me in many ways. Last but not least, many thanks to one of my Adlerian friends, who had been encouraging me to go and join ICASSI, which lead me to present this translated article to my fellow Adlerian readers.

Last but not least, I can never thank Dr. Noda enough for his patience to keep encouraging me to face life tasks and challenges for these long years.

更新履歴

2021年7月20日 アドレリアン掲載号より転載